

ダ・ヴィンチと富岩運河の2つの水門

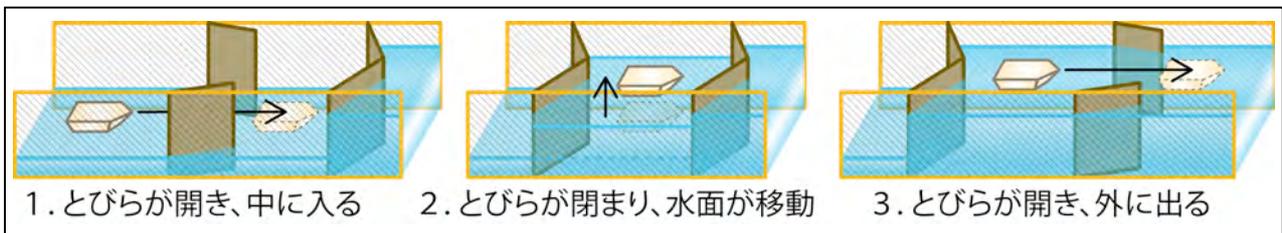


科学博物館では、特別展「レオナルド・ダ・ヴィンチ もう一つの遺産 —ノートにのこした自由研究—」を開催中です。今回は、特別展の中から富山に関係の深いお話をしましょう。

富山駅の北口から歩いて10分のところにある環水公園からは、岩瀬方面まで伸びる運河があり、富岩運河と呼ばれています。この運河を使うと、環水公園から富山港まで、船で行き来できるようになっています。

富山港まで、船で行き来できるようになっています。

運河は船の道路のようなものですが、坂道はのぼれません。しかし、環水公園付近は富山港付近より地面が高いため、水面も高くなっています。そこで、この水面の高低差を乗り越えるため、2つの水門を使った水のエレベータが作られました(図1)。このような仕組みを「閘門」といいます。環水公園から約2km下流の所にあり、中島閘門と呼ばれており、1998年に昭和の土木構造物としては全国で初めて国の重要文化財に指定されました。



この閘門の起源は約500年前のヨーロッパにさかのぼり、イタリアのミラノにはりめぐらされた運河のために、レオナルド・ダ・ヴィンチが考案し、自ら建築を指揮したとされています。この方式は1914年に完成した大西洋と太平洋をつなぐパナマ運河で採用され、富岩運河でも同じ方式の中島閘門が1934年(昭和9年)に作られました。

特別展では、元となったスケッチを展示しています。500年も昔のアイデアが今でも役に立っているなんて、おどろきですね。(2013年8月 市川真史)

